

今やソフトロックの代名詞と言っても過言ではないソルト・ウォーター・タフィー。唯一のアルバム『Finders Keepers』は素敵なメロディがいっぱい詰まった宝箱のようで、初めて聴いた時、心が暖かさで満たされたのを思い出す。お洒落なもの、計算され尽くした精緻なプロダクション、時代を超えたクールなサウンドというものは他にもあるが、暖かさに溢れたアルバムは格別だ。旧版で最高ポイントを付けただけでなくその中でもトップに持ってきたのには、ソルト・ウォーター・タフィーに対する特別な思いがあったからだ。さてそのソルト・ウォーター・タフィーの中心は作曲/プロデュースを担当したロッド・マクブライエンである。ロッドがかかわった作品でヒットに結び付いたものはほとんどないものの、そのポップセンスは群を抜いており、本書でも「ロッド・マクブライエン・ワークス」としてまとめてあるので合わせてそちらもお読みいただきたい。アンダース＝ボンシアの下でエンジニアを努め、既にフロントに立ってシングルも制作していたロッドは、イースターン・シーン時代から仲間のジョン・ジアメッタと共に「Finders Keepers」を書いた。さっそくレコーディングするためにスタジオ・ミュージシャンを集め、セッション・シンガーのTommy Piccardo がリードヴォーカルを取って、この愛らしいパブルガムソングが生まれた。シングルはパブリックアンダーながら105位と僅かにチャートイン、さっそくブッダ・レコードはメンバーを集め、後期ヴァルレイズのメンバーだったロッド、ジョン、Phil Giarratanoの3人を中心に、さらに2人の美しい女性kathy WeinbergとJanie Branonを加えた5人がオリジナル・メンバーとなった。しかしこのメンバーもグループが存続していく間に変わり、ロッドとジョンが裏方に回ったため、最後までメンバーだったのはPhilとKathyだけだったと言う。(この二人は後に結婚している)さて、ブッダで制作されたアルバム『Finders Keepers』

は、軽いプロダクションながらアレンジャーのMeco Monaldoの卓抜したホーン・アレンジが素晴らしい、全ての曲にイントロから一気に引き込んでしまう力があつた。ロッドの書くキャッチーで暖かいメロディ、これはアンダース＝ボンシアと同一線にある東海岸の黄金のポップスの系譜にある。歌はリードのPhilやKathy達の声質が甘くソフトだったため、曲とサウンドにピッタリはまっていた。モータウン風の「Love Don' Keep Me Waiting」やボサノヴァの「Suddenly I See」、ダンスパルな「Stick & Stones」、そしてアルバム最後の心引かれる暖かいメロディに満ちた「I'll Get Along Somehow」など、バラエティに富んだ曲の数々はどれも傑作揃い、しかしこの名盤もヒットには無縁に終わる。アルバムの後のシングル「Loop De Loop」は切れ味の悪い出来だったが、ブッダでのラストシングル「Easy Does It/It's All In Your Hand」は秀逸な出来となる。A面はビートの効いたキャッチーなナンバー、B面は広がりのあるホーンに乗った転調を生かしたメロディの佳曲で、どちらも違った魅力があつた。その後ユナイテッド・アーティストから出した「Summertime Girl/One Hand Washes The Other」はA面がアンダース＝ボンシア作のパワーポップ版、B面はロッド得意のウォームフルなナンバーで、これも価値あるシングルとなる。その後このシングルの権利はメトロメディアに売られ、B面を牧歌的な「Spend The Sunshine」に変えて再リリースしたもののどれもチャートからは無視されたままで、グループも解散している。【佐野】



DISCOGRAPHY は Rod McBrien Works 内